

研究課題：高品質酒造好適米生産に向けた酒米団地の改善方策

（多様な米ニーズに対応する品種改良並びに栽培技術の早期確立

1-7) 米の多様化に伴う産地・流通体制の検討)

担当部署：中央農試 生産研究部 経営科

協力分担：中央農試 生産研究部 水田・転作科、上川農試 研究部 栽培環境科

予算区分：受託（民間）

研究期間：2004－2008 年度（平成 16 年－20 年度）

1. 目的

酒造好適米(以下、酒米)品質は年次・団地間格差があり酒米需要喚起に向けた生産上の課題になっている。そこで、空知管内にあり近接地域で気象条件も近く、一般水稻の反収水準はほぼ同等ではあるものの、酒米品質が異なる酒米団地の実態解析を通じ、品質改善に向けた方策を明らかにする。

2. 試験方法

- 1) 酒米生産動向と酒米団地の特徴整理（統計・資料整理、団地 A、B 産米品質比較）
- 2) 酒米団地 A、B での品質改善への取り組み比較（関係機関・生産者聞き取り調査、資料分析）
- 3) 酒米生産の実態解析（生産者調査、クラスター分析、AHP 分析(重要度比較)、技術比較、収益性検討）
- 4) 酒米団地形成過程の実態解析（資料整理、JA・生産者聞き取り調査、団地形成過程の聞き取り調査）

3. 成果の概要

- 1) 主要酒米団地の H17 年減産率は産地指定率の高低で異なり(図 1)、品質確保・向上による産地指定の重要性が示された。高品質な米生産を目指す JA 管内にある団地 A は、酒米生産についても高品質化を目指し、高品質米生産地域・生産者に限定した団地を形成した。その結果、生産者は高単価重視（品質前提）または品質重視の生産により高品質酒米を生産し(図 2)、団地評価を維持してきた。品種あるいは地区別に米のブランド化が進む JA 管内にある団地 B は、地域一円で生産し、生産者特定方針はあったが選抜はしていない。水稻生産における生産者の視点は統一性が無くばらついてきたこと、団地形成時の技術指導が十分ではなかったことが、生産者段階での生産条件や、肥料多投等の生産管理面の差として生じ、結果として品質低迷に結びついたと考えられた(図表略)。
- 2) 団地 B でも品質が良い(改善した)生産者は、①酒米に適した圃場選択、②施肥量見直し、③側条施肥導入を要因にあげているが、積極的に品質改善に取り組んだ事例は僅かで、割当面積維持のための消極的対応もあった。但し、タンパク質含有率の低下自体は団地 B における品質改善の可能性を示した(表 1)。酒米の反当所得は、団地 B ではきさら比で 29 千円高いが(H17・19 平均)、生産維持と付加価値向上には品質評価に基づく産地指定獲得がことさら重要である(図表略)。
- 3) 道産酒米としては団地 A 産米のみ(団地 A 生産量の 70%相当)を使用している酒造業者は品質評価から産地指定を行い(図表略)、団地 A は品質改善を通じて酒造業者の顧客価値(業者メリット)を高め、指定数量拡大と安定生産を実現した。団地 B は生産条件差が団地形成以降も解消されなかったこと、酒造業者との関係が薄い(顧客価値が低い)こと、などが低産地指定率の要因であるため(表 2)、品質重視の酒米生産への移行のための品質向上・安定が必要である。
- 4) 以上から、酒米団地の維持・拡大には品質確保が重要であり、そのためには目標明確化と目標達成への適切な技術対応を講じる必要がある。第一に、生産者は適切な栽培管理と圃場選択の見直し、生産組織には情報公開と共有、関係機関と共に酒造業者ニーズ等に基づく技術対策・集出荷体制整備の実践が求められる(図 3)。第二に、課題整理のための調査、データ整理を行い生産者別(あるいは地区別)に課題整理することが有効である。さらに高品質化に向けて生産者や圃場選定、組織拡大に伴う生産者間の意識差是正が重要と考えられた。

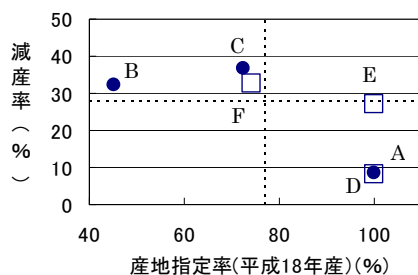


図1 産地指定率と減産率 (H17/16 年比)

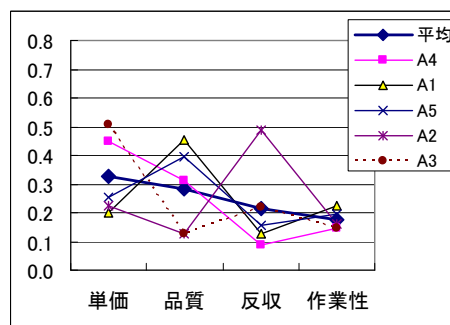
注) 点線は全道平均、●は平均入庫 3,000 俵以上、□は同 1,000 俵以下

表1 団地B生産者の低タンパク化と要因

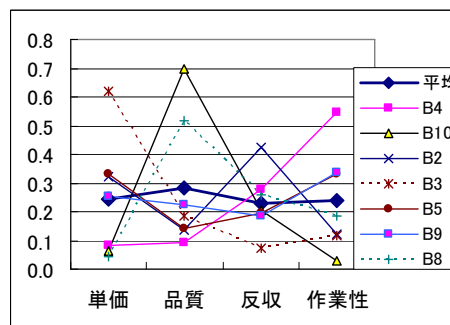
生産者	圃場選択	タンパク質含有率と低下要因				
		H15	H16	H17	H18	H19
B 2	低タンパク圃場	8.4圃場	7.0圃場	6.9	7.1	7.3
B 9	面積見合	8.7	7.8	7.3	7.1圃場	7.3
B 8	面積見合	8.6	8.0	7.7減肥	6.9播種遅	7.2
B10	適圃場	8.4	8.1	7.4側条	7.0乾田化	7.3
B 4・中苗	面積見合	8.5	7.6圃場	7.6	7.4	7.3
B 3	適圃場	8.7	7.6	7.6	7.2乾田化	7.3
B 5星	面積見合	8.1	8.0	7.3	7.8	7.8ボツ
BS1彗星	低タンパク圃場	8.3	6.8	6.7	6.8	6.5彗星
BS2彗星	面積見合	8.5	8.3	7.8	7.4圃場	7.1彗星

出所) 団地B 生産者聞き取りおよび団地B資料

注) 圃場は圃場変更、彗星は彗星転換、播種遅は播種を遅らせた、側条は側条施肥導入、乾田化は圃場が乾田化した、適圃場は酒米生産に適していると考えた圃場選択のこと、網掛けは対策後を示す。分析対象 25 戸。B2、B8、B10、B4、B3は生産組合役員(現・前)



団地A



団地B

図2 団地A、B 生産者が水稲生産において重視する点

注) 団地A・5 戸、B・7 戸の生産者対象、AHP 分析の評価基準の重要度比較を用い、単価、品質、反収、作業性の4項目の一対比較で合計値は1.0、ただしC.I.値が0.1を超える生産者データの使用に注意。

表2 団地形成の特徴とその結果

項目	団地A:高指定率	団地B:低指定率	結果(違い)
生産条件	限定	限定せず	団地間で品質差が生じ、品質のバラツキにも違い
生産管理	限定	限定せず(方針有)	団地間で品質への認識に差が生じ、栽培技術にも違い
品質目標	明確で共有化	目標あるが共有化されず	
指導	低タンパク化	H20から減肥指導	
生産情報	公開・共有	H18から公表	
改善対策	土壌診断・施肥設計等	H20から土壌診断	
ニーズ把握	特定業者と持続的研修で入手(酒造業者との関係強い)	不特定業者への視察(酒造業者から改善要請や具体的な技術対応に差)	

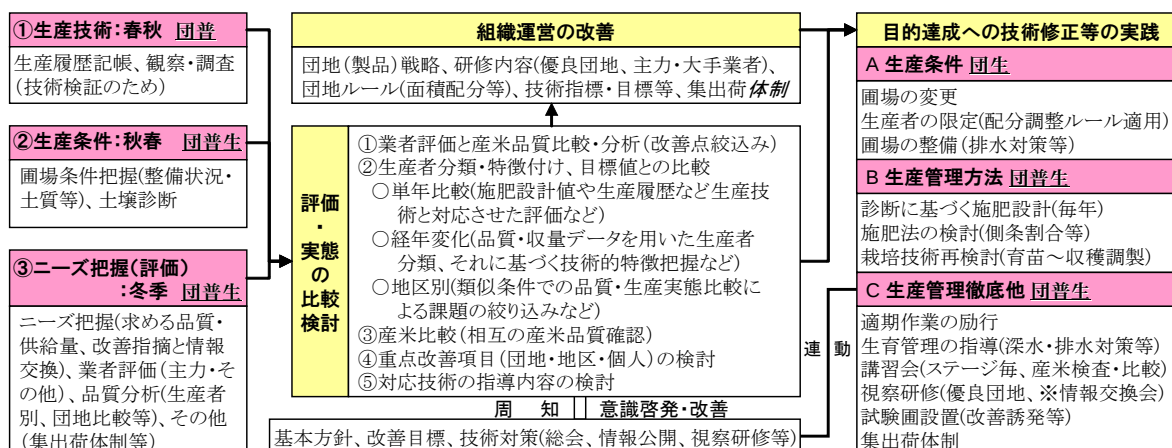


図3 団地化の留意点と改善方策

注) 団はJA・酒米生産組合が主に担い、生は生産者が担い、普は普及センターが支援することを示す。※は集荷団体等が担う。

4. 成果の活用面と留意点

- (1) 酒米団地の再編や組織拡大時において参考となる。
- (2) 栽培技術の改善方策については別途関係する研究成果を参照のこと。

5. 残された問題とその対応

なし